集英社版
世界文学全集

64

ドライサー　アメリカの悲劇II

© 1978 Shueisha Printed in Japan

集英社版　世界文学全集　64

アメリカの悲劇　Ⅱ

一九七八年十一月二十五日　印刷
一九七八年十二月二十五日　発行

訳　者　宮本陽吉

編　集　株式会社　綜合社
一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）二三九―三八一一

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
一〇一　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三八―二七八一

印刷所　凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています

0397-168064-3041

目次

アメリカの悲劇 Ⅱ　宮本陽吉訳　3
後記・注解　411
解説　大浦暁生　415
年譜　425

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

アメリカの悲劇　II

第Ⅱ部（つづき）

41

六月五日が来ると、ソンドラが言っていたように、フィンチリー家の人たちは出発したが、むろん、二週目か三週目の週末にはクランストン家のパーティへ来るように準備をととのえていてくれと熱心に誘われていた――細かいことはあとから知らせるということだったけれども――ソンドラの出発に心が動揺していたし、ロバータの妊娠騒ぎですっかり気が滅入っていたので、留守ちゅう自分はどうすればいいかまるでわからなかった。それにちょうどこのころになると、ロバータの恐怖と要求とはきわめて切迫したものになって、もう少し待ってさえくれれば何とかする準備もととのうという保証はもう無理になった。精一杯説得してみたところで、ロバータのほうは危険な状態であって、もういかなる一時しのぎも役に立つことはないと言った。体つきは、ロバータも主張しているように（これは多分に想像力のせいもあったけれども）もうこれ以上隠せないくらいまで変わってきていたし、工場で一緒に働いている仲間も気づくにきまっていた。仕事をしていても、眠っていても心の安らぎはない――これ以上、この土地にとどまっているわけにはいかなかった。前触れの痛みをさえ感じる始末だった――彼女の場合は、純粋に想像力のせいだったけれども。クライドはまえから約束していたように、いま結婚して、すぐに離れなければならない――どこかへ――どこでもいい――遠かろうが近かろうが――この現在の恐ろしい危険を逃れることができるのであれば。それに、子供が生まれさえしたら、あなたは自分の好きなようにしていいと、ほとんど訴えるように彼女は言った――本当に――そして、これ以上迷惑をかけたりしない――絶対に。そしていま、今週ちゅうにでも――どんなにおそくとも十五日までには――約束どおりに現在の難関を切り抜ける用意をしなければならない。

しかし、そうすることは、トウェルフス湖のソンドラを訪問するまえにこの土地を去ることになるし、事実上、もう会えないのと同じことになる。それに、自分でもよくわかっていることなのだが、ロバータが主張する新しい冒険を可能にするだけの貯えはなかった。ロバータは、百ドル以上の貯金がある、結婚したらあなたがきめた土地へ行く

費用の足しにしてもらっていいと説明したが、それもむなしかった。クライドのわかったこと、また感じたことといえば、これで何もかも失うことになる、どこかかなり近い所へ行って、可能なかぎり彼女を助けるために手に入る仕事を何か見つけなければならなくなる、ということだった。しかし、なんというみじめな変化だろう！　自分のすばらしい夢のすべてを失うことになる。それにしても、どう頭をひねってみても、彼女が仕事をやめ当分郷里に帰るという程度のことしか考えつかなかった。そして、いかにも抜け目なく、二人の上に訪れる変化にそなえるためにもう数週間必要だと思うと言った。それというのも、精一杯の努力をしたにもかかわらず、自分が欲しいだけの金が都合できなかったと、嘘をついた。自分が考えている変化に対応する生活の変化にそなえる金額を集めるにはあと三、四週間はかかる。そう言えば、彼女は百五十ドルか二百ドル以下とは考えないにきまっている――彼女の目にだって大金と映るにちがいない――ところがクライドはといえば、給料のほかに四十ドルの貯えしかないし、その期間に都合のつく金銭にしても、予定のトウェルフス湖行きの費用にあてるつもりだった。

だが、短期間郷里へ帰るという一時逃れの提案をさらに支持するために、きみも少し準備がしたいだろうからね、とつけ加えた。結婚式をあげ、あらゆる意味での社会的状況も変わるこんどの旅行のことでもあるので、衣裳を少しよくしなければならないだろう。きみの百ドルかその一部分を使ってもいいのではないだろうか？　自分自身の立場があまりにも切迫していたので、そんなことさえ言ってみた。するとロバータのほうは、自分がどうなるかこれまでのところまるで不安定だったので結婚衣裳も新生児用品も準備することも買おうともしていなかった。これまでのほかの場合と同じように引きのばし策の一種であって、提案の最終的な目的は何であるにしろ、二、三週間かけて時おり妹の仕事を手伝っている値段も安く技術もかなりいいドレス・メーカーに少なくとも一、二着頼んでみるのも悪くないと思った――以前に映画で見たことのある、あんな花模様のついたタフタのアフタヌーン・ドレスを着て、クライドが約束を守ってさえくれたら、結婚式もあげられるだろう。その好ましい衣裳に合わせて、いきな小さな灰色の絹の帽子――縁が突きでて、縁のかげに深紅かピンクの桜ん坊が模様になっている帽子に、こざっぱりとしたブルーのサージの旅行服、それに茶色の靴に茶色の帽子を用意しておけば、誰に比べても少しも見劣りのしない花嫁姿になる。そういう準備をととのえることはさらに時期を遅らせ出費をかさませること、最終的にはクライドが結婚しないこと、現在の提案された結婚が二人にとっては変色し色あせたものであるということ、それは結婚という事件、神聖

でさえある事件という考え方を捨てさせるだけの力はなかったし、彼女の目から見ればそなわっている本来の色彩やロマンスを、こういう不満な状況のなかでさえも消すことはできなかった。二人のあいだにあれほど混乱した緊張関係があったにもかかわらず、最初とはそれほど変わらない目でクライドを見ていた。あの人はグリフィス家の一員で、経済的には目立った存在ではないにしてもまぎれもなく社交界の青年であって、自分と同じような地位にある者はむろん、ずっと上の娘たちだってこういう――結婚を通じてだけれども――関係になることを喜んで求めるだろう。私との結婚を嫌っているかもしれないが、有力な人間であることに変わりはない。少しでも私を愛してくれるのなら、私は本当に幸福なのに。それにしても、以前は愛してくれたというのに。男というものは――全部と言わないまでもある男たちは（母やまたほかの女たちが言っていた）、いったん子供が生まれると、母親に対する態度ががらりと変わることがあると言っていたのをきいたことがある。男たちは子供のせいで母親を愛するようにもなる。いずれにしてもしばらくのあいだ――ごくわずかのあいだであるにしろ――承諾したことを厳重に守るならば、この重大な危機をのりこえてもう一度なんとか独り立ちできるまで力になってくれるはずだし、彼の名前を子供につけてやることができる。

したがって、さしあたってこれ以上の計画もほかにないので、クライドの冷淡さには気づいていたし、大きな不安と苛立ちとを感じてはいたけれども、彼女はこの計画に従うことにした。そんな心境のなかでロバータは両親にまず手紙を書き、服を一、二着作り、また健康がすぐれないので少し休養したい気持もあるから、少なくとも二週間は帰っていたい旨を伝え、五日後にクライドは、彼女がビルツの生家へ帰るのをフォンダまで見送りに行った。しかし、クライドのほうはというと、はっきりとした、もしくは効果的な考えも見つからないので、ただ沈黙することが、黙っていることだけが、重要な不可欠な方策のように思え、それで、いまにも災厄というナイフの刃が落ちてきそうな状態にあって、ソンドラについて何かいい考えを思いついた場合でも、何かをするように強制されることもなく、またロバータが神経質で気まぐれで気違いじみた状態で、その実現をさまたげるような行動に出るという不安に少しも苦しめられることもなしに、もっともっと考えてみることが可能になるかもしれない。

そしてほぼ同じころ、ソンドラのほうは、もうすぐクライドがやってきたらどんな喜びが待ちうけているかを、楽しげに書きつらねた手紙をトウェルフス湖から出した。青い水――白い帆――テニス――ゴルフ――乗馬――ドライヴ。手紙によれば、バーティンと手はずをととのえたとい

うことだ。そして、キス、キス、キスを！　と書いてあった。

42

クライドが直面している難局をきわだたせるように、このころに二通の手紙が同時に着いた。

パイン岬船着場にて　六月十日

私の大好きなクライドちゃん

私の大好きなあなたはどうなさってる？　お元気？　ここはとってもすばらしいの。もうずいぶん人が来てるし、毎日どんどんふえてゆくわ。パイン岬にあるクラブ・ハウスやゴルフ・コースも開いていて、あたりは人でいっぱいよ。いま、グレイス湾のほうへ行くスチュワートやグラントのランチの音もきこえるわ。あなたも早く来ることね。とても口じゃ言えないほどすばらしいわ。馬で走りぬける緑の道、水泳、午後四時にクラブ・ハウスでやるダンス。ディッキーに乗って駆けてきたところだけど、お昼ご飯をすませたら、この手紙と一緒にほかのも出しに行くつもり。バーティンは、あなたに今日か明日、週末ならいつでも来ていいと手紙を書くと言ってたわ。だから、ソンダが来いと言ったときには来るものよ、わかった。でないとソンダが鞭でたたくから。いい子になるのよ、いたずらっ子さん。

いたずらっ子さんは、いつもの工場でせっせと働いてるの？　ソンダはね、そんなことをするかわりにここへ来てほしいのよ。一緒に馬に乗ったり、ドライヴしたり、泳いだり、ダンスをするのよ。テニスのラケットとゴルフ・クラブを忘れちゃだめよ。クラブ・ハウスの所にしゃれたゴルフ・コースがあるわ。

今朝、私が馬に乗ってたら、小鳥がディッキーの蹄の所から飛び上がったのよ。ディッキーはあわてるし、ソンダはキリキリ舞いだったわ。クライディーも、あなたのソンダが可哀相じゃない？

ソンダは今日はたくさんお手紙を書いてるのよ。お昼のお食事をして、下りの便に間に合うように車で手紙を出しに行って、そのあとでバーティンとニーナと一緒にクラブ・ハウスへ出かけるの。あなたも行きたくない？「トゥディ」に合わせて踊れるのよ。ソンダはあの歌が大好きなのよ。だけど、もう着替えをしなきゃならないわ。また明日ね、いたずらっ子さん。毎日ソンダにお手紙ちょうだい。この点はなんだかわかる。キスよ。大きいのや小さいの。みんな、いたずらっ子さんのものよ。ソンダに毎日書いてくださったら、ソンダだって書くわ。

もっとキスを。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

クライドは熱心に、時を移さず手紙を書いた。しかし、同じ便ではなかったけれど、少なくとも同じ日に、ロバータからつぎのような手紙がとどいた。

ビルツより、六月十日

親愛なるクライド――

もう寝ようと思っていますけど、ちょっとお手紙を書くことにします。こんどの旅行はとても疲れてしまって病気になりそうです。まず第一に、あなたもご存知のとおり、あんまり来たくなかったんですもの（一人で）。私たちの計画はきまってますし、あなたも私を迎えに来てくださるとおっしゃっているので、そんな気持にならないようにしているんですけれど。

（ここまで読んだときに、ロバータが不幸にも避けがたい結びつきを持っている、あのみじめな片田舎を思うと気分が悪くなりそうだったが、その一方では彼女のことで後悔と憐れみとがいり雑じった痛みを覚えた。いずれにしても、こんなことになったのは彼女の罪ではなかったのだから。彼女にはほとんど未来というものがなかった――仕事をするか平凡な結婚をするかどっちかだった。じじつ、何日ものあいだに初めて、ソンドラもロバータも近くにいないせいか、はっきりとものを考えることができた――そして、暗い気持ではあるにしても、深い同情を感じることができた。手紙の残りの部分はこう書いてあった）

だけど、いま、ここはとてもすばらしいです。木々は緑が美しく、いろいろな花が咲いています。南の窓に近づくと、果樹園の蜂のブンブンいう音がきこえます。まっすぐに家に帰るかわりにホーマーで降り妹夫婦に会うことにしたのです。またいつ会えるか自信がなかったからです。あの人たちの目に自分がちゃんとした人間に見えないかぎり、もう姿を現わさないつもりだったんですもの。そうだからといって、私を冷たいとか意地悪だとか思わないでくださいね。私はただ悲しいだけです。妹たちは、とってもおしゃれな家を持っているんですものね――可愛い家具、ヴィクトローラやいろんなもの、アグネスはフレッドとほんとに幸せそうに暮らしているんですもの。いつまでも幸せであってほしいわ。もし私の夢が実現さえしたら、どんなすばらしい家に住めるだろうって思わないわけにいきませんでした。そこにいるあいだじゅう、フレッドがなぜ結婚しないのかって私をからかってばかりいるもので、とうとう私も言ってやりましたわ。「あら、近いうちに結婚するかもしれないわ。果報は寝て待てって言うじゃないの」「そう、だけど待

ってばかりってこともあるからな」なんてフレッドはやり返すのよ。

だけど、クライド、お母さんにまた会えてよかったわ。愛情があって、辛抱強くて、とっても気のつく人よ。あんなに優しい、いいお母さんってほかにいません。それで、どんなことがあっても、母の心だけは傷つけたくないんです。トムやエミリイも、私がここへ戻ってから毎晩友だちを連れてきます——そして私も仲間に入れと言ってくれるんですけど、いまは仲間いりをするだけの元気がありません——トランプやゲーム——それにダンスをするだけの。

（ここまで読んだときにクライドは、彼女がその一部分であり、またつい最近見たばかりの、あのみすぼらしい郷里を心のなかで強調してみずにはいられなかった——あのぐらぐらする家を！　あのぐらついた煙突を！　粗野な父親。それに、ソンドラからの手紙と対照的な手紙の内容）

父と母とトムとエミリイは家にいて、私のためにあれこれと気を配ってくれるようです。それで、みんなが真実を知ったらどんな気持になるかと思うと後悔します。それも、私が疲れて気が滅入っているのは仕事のせいだということにしているからです。母は長いこと滞在するか、さもなければ工場をやめて元気になるまで休養しなけりゃいけないと言いますけど、もちろん何にも知らないからそんなことを言うんです——ほんとに可哀相。お母さんが本当のことを知ったとしたら！　ときにはたまらない気分になります。クライド。ああ、クライド！

だけど、私の悲しい気持をあなたにおしつけるのはよくないことね。あなたにも言ったように、約束どおり私を迎えに来てくださるんならそんなことをするつもりはありません。それに、そんなふうにはなりませんわ、クライド。いまだって、年じゅうそういうふうじゃないんですもの。もう準備を始めていますし、全部しおえるのに三週間はかかるでしょうし、仕事のほかは何を考える暇もないはずなのよ。でも、本当に迎えに来てくださるんでしょうね？　だけど私をもう失望させないでください。いままでみたいに苦しめないでください。とっても長かったんですものね——本当にクリスマスまえにここへ来てからずっとですものね。でも、あなたは本当に親切でした。あなたの重荷にはもうならないと約束します。あなたが本当に私を愛していないのはわかってますし、こんどの問題から脱出さえできたら、いまどんなことがあろうと私はかまいません。しかし、あなたの重荷にならないことは約束します。

こんなシミがついたりしましたけど、気になさらない

でください。昔みたいに自分をおさえることができないような気がするんです。

だけど、私が何をしに帰ってきたかということですけど。家族の者は、ライカーガスのパーティで着るものだと思って、すばらしい生活をしていると思っています。ええ、そう思われているほうがずっといいにはちがいないんですけれど。ドレス・メーカーのアンスさんが行ってくれない場合には、私がフォンダまで買物に出かけることになるかもしれません。そのときには、あなたがいらっしゃるまえにお会いになりたいんなら、とってもそうは思えませんけど、お会いになれますわ。もしそのお気持がおありになるんなら、出発するまえにお目にかかって、もう一度お話ししたいことがあるんです。こんな服をこさえたり、こんなに会いたがっているというのに、あなたが気がすすまないと思ったりして、ほんとにおかしいわ、クライド。それにしても、私をライカーガスから離れさせ、ここへ来させて、あなたはせいぜい楽しい時間をすごして、きっとご満足なんでしょうね。去年私たち二人で湖へ出かけたりなんかしたよりもずっと楽しいんでしょうね？　しかし、それがどうであろうと、私がひどい目に会っているのはきっと気がかりなはずですわ、クライド。あなたにとってつらいことなのはわかっているけど、私が私の知ってる誰かみたいだったら、もっと多くを要求するかもしれないし、たぶんそうするだろうっていうことも忘れないでほしいんです。しかし、あなたにも言ったように、私はそんなふうになれそうもありませんし、絶対にそうはなれません。私も言っているように、いまの状態から救いだしてさえくださって、そのうえで私を本当に求めていないんなら立ち去ってもいいんです。

私にお手紙をくださいね、クライド。たとえその気にならなくっても、長い、陽気なお手紙を。お前がいなくなってからお前のことを思い出したことがないとか、ちっとも淋しくないということだっていいから――あなたって、いつもそうなのよ。迎えに行くにしても、土曜日から二週間後でなけりゃ駄目だとでも書いてちょうだい。

ああ、こんな厭なことを書くつもりはなかったんだけど、とても陰気で疲れてしまって、淋しくなると書かずにはいられなくなることがあります。話し相手になってくれる人が欲しいんです――ここにはそういう人が誰もいないんです――こっちの言うことを理解してくれないし、話すわけにはいかないんですもの。

陰気になったり、湿っぽくなったり、不機嫌になったりしないと言っておきながら、この手紙もまたうまく書けませんでしたわね？　だけど、このつぎ――明日かそのつぎの日には、もっとうまく書くと約束します。クラ

イド、あなたに手紙を書くとほっとするんですもの。こうして待っているあいだに、ほんの二言三言でも私を元気づけるようなことを書いてくださらないかしら。本当にそう思ってなくても、どうしても言ってほしいんですものね。それから、もちろん来てくださいますわね。来てさえくだされば、私はとても幸福な感謝に満ちた気分になって、絶対にあなたにご迷惑をかけないようにします。

あなたの孤独なパートより

絶対に――絶対にロバータとは結婚しない、ビルツへ行くことも、こっちへ帰らせることも、できることならせずにすませたいという気持を決定的なものにしたのは、この二つの情景が見せている対照だった。迎えに行ったり連れて帰ったりしていたのでは、ソンドラとの関係で最近になって訪れた喜びも一切終わりになってしまう――この夏トウェルフス湖でソンドラと一緒にすごすこともできなくなる――ソンドラと駈落ちして結婚することだってできやしない。ああ、何か方法はないんだろうか？　いま自分自身が直面しているこの恐ろしい困難を脱出する道は？

六月のある暖かい晩に仕事から帰ってきて自分の部屋にあるこの手紙を見つけると、絶望の発作に襲われ、ベッドに身を投げかけて、本当に呻き声をあげてしまった。なんとみじめなことだろう！　ほとんど解決の方策がないという恐怖！　ロバータをどこかへ行かせるように説得して――そこに滞在させる――たぶん彼女の家にでももうしばらくいさせて、そのあいだは週に十ドル、いや十二ドルだって送ってやろう――彼がとっている給料のまるまる半分だって。フォンダか、グロヴァーズヴィルか、スケネクタディか――それほど月日は経っていないし、まだ充分に一人で動けるから、部屋を借りて静かにひきこもり、いざというときになったら、医者なり産婆なりの所へ行けばいいではないか？　その時期が来れば、そういう人を探す手伝いくらいはしてもいい。ただし、こっちの名前を持ち出さなければの話だけど。

しかし、ビルツへ出かけるとか、どこかで落ち合うとか、しかも二週間以内だなんて。そんなことをする気になれるもんじゃない。あの女が無理にもそんなことをさせようというんなら、こっちも何か途方もないことをやるだろう――逃げだすとか――さもなければ――ビルツへ行くときが来るまえに、もう来てくれるころだと期待するまえにトウェルフス湖へ行って、何とかソンドラを説得するとか――だけど、こりゃ途方もない着想だな――まだ十八歳にもなっていないというのに、駈落ちして結婚するなんて――そうすれば――そうすれば――結婚さえしてしまえば、家族の者たちも別れさすわけにいかないだろうし、ロバー

タだって、おれを見つけだすことはできないだろうし、せいぜい文句を言うくらいのものだ――そう、身に覚えのないことだと言ってやればいい――嘘だと言ってやろう――職場の主任が自分の下で働いている娘と持つ関係以上のものではないと言ってやろう。下宿屋のギルピン夫妻に顔を知られているわけでもないし、グロヴァーズヴィルのそばのグレン医師の所へだって、ロバータとそろって行ったわけではない。それに、ロバータもあなたの名前は出していないと言っていた。

だが、否定するなんて厚かましいことだ！

勇気がいるだろう。

ロバータの顔をまっすぐに見る勇気。ロバータの動かない、非難するような、おびえた青い目をまっすぐに見ることは、何ものにもまして困難なことは自分でもよくわかっていた。そんなことが、自分にはできるだろうか？　その勇気があるだろうか？　勇気があるとすれば、すべてが思いどおりに運ぶだろうか？　噂をきいてしまっても――ソンドラはおれの言うことを信じるだろうか？

それにしても、トウェルフス湖へ行くには行っても、実際にそういう話を持ち出すかどうかはともかく、行くという手紙をソンドラに書かなければならない。そして、その手紙を、情熱と憧憬とをこめた口調ですぐに書いた。同時に、ロバータへは何も書かないことにきめた。このあいだ、彼女は近所の家に電話が入ったので、もし何か必要があればそれを使ってもいいと言っていたから、長距離電話をかけてもいい。なぜなら、たとえ精一杯用心ぶかく書くにしても、手紙を書くことは、こんなときに、とりわけ結婚すまいと決心しているときに、何よりも彼女が最も必要としているこんどの関係についての証拠を手渡すことになってしまう。なんというきたないやり方だろう！　確かに下劣なやり方だ。それにしても、ロバータがもう少し物わかりがよければ、こっちもあんな下劣でいんちきな手を使おうとは夢にも思わなかったろう。だけど、ああ、ソンドラ！　ソンドラ！　それに、トウェルフス湖の西にあるという広大な所有地。きっと美しいにちがいない！　自分としてはこうするよりほかはない！　いまのように行動し計画を立てるしかない！　それ以外にない！

そして、すぐに立ちあがると、ソンドラへの手紙を投函しに行った。出かけたついでに夕刊を買い、気分をまぎらせるのに地方のニュースでも見ようとひろげてみると、そこに、オールバニーの「タイムズ・ユニオン」紙の第一面にこんな記事が出ていた――

パス湖で二重の悲劇――転覆しているカヌーと漂っている帽子――ピッツフィールド近郊で二人の生命が失われた模様――身許不明の若い女性の死体発見さる――同

乗の男の死体はいまだに不明

カヌーにはとても興味があったし、ボート漕ぎ、水泳、ダイビングにとくに熟練していたばかりでなく、あらゆる種類の水のスポーツに関心があったので、熱心に記事を読んだ。

マサチューセッツ州パンコースト、六月七日……カヌーに乗って遭難したことが明らかになった二人は、一昨日、当地から十四マイル北にあるパス湖に、ピッツフィールドから遊びに来たものと思われる。

火曜日の朝に、二人の若い男女が、クラブ・ハウスの貸ランチとボート小屋を経営しているトマス・ルーカス氏に向かって、ピッツフィールドから来たものだと語り、午前十時ごろに小型のカヌーを借り、昼食が入っていると思われるバスケットを持って、湖の北端に向かって出発した。昨晩七時になっても二人は帰ってこないので、ルーカス氏は息子のジェフリイとともにモーターボートで湖を一周したところ、北岸近くの浅瀬で転覆したカヌーを発見したが、乗っていた二人の姿は、まったく見あたらなかった。またカヌーの乗り逃げかと思い、カヌーをドックへ戻した。

しかし、今朝になって、事故が起きたのではないかと思い、助手のフレッド・ウォルシュと息子とともにまた北岸へ行き、岸辺近くの藺草のなかに男女の帽子が浮かんでいるのについに出会った。すぐに捜索隊が組織され、三時には若い女の死体がひきあげられ当局に引き渡されたが、この女性については連れと当地を訪れたという以外は何もわかっていない。男の死体は、いまだに発見されていない。事故のあった付近は水深三十フィートをこえ、網を打ったり底をさらったりしてもう一人の死体を発見できるかどうかは不明。約十五年まえにも同様の事故があったが、やはり死体は発見されなかった。

女が着ていた小さな上衣の裏地には、ピッツフィールドの商店の名前が縫いつけてあった。また靴の裏地にも同市のジェーコブズという店のスタンプがあった。しかし、その他には身許を示すものはまったくなかった。当地の警察は、ハンドバッグを持っているにしても、底に沈んでいると推定している。

関係者の記憶によれば、男は背が高く、肌の色は黒っぽく、三十五歳くらい、ライト・グリーンの背広に、白と青のバンド付の帽子だったとのことである。女性のほうはせいぜい二十五歳、身長五フィート五インチ、体重百三十ポンド。長い暗褐色の髪を編み、頭に巻いていた。左の中指には紫水晶をはめた小型の金の指環をつけている。ピッツフィールドおよびその周辺の警察に照会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com